



2009・6・8

第125号

101-0065 東京都千代田区  
西神田 2-5-7 神田中央ビル 303

TEL 03-3221-5075

FAX 03-3221-5076

## 加藤周一さんの志受けつぐことを決意

### 「講演会」に2000人超参加

「九条の会」は6月2日、「九条の会講演会——加藤周一さんの志を受けついで」を開催しました。2000人を大きく超える人びとが参加した講演会では、よびかけ人の井上ひさしさん、大江健三郎さん、奥平康弘さん、澤地久枝さんが講演、加藤周一さんのパートナーの矢島翠さんがあいさつしました。また、都合で参加できなかったよびかけ人の梅原猛さん、鶴見俊輔さんからはメッセージが寄せられ、紹介されました。

なお、講演会に先立ってよびかけ人会議が開かれ、そこで話し合われた内容が事務局から発表されました。

以下、講演、あいさつ、メッセージの要旨を紹介します。

### よびかけ人の講演(要旨)

#### 井上ひさし(作家)

私は昭和9年、山形県南部の山あいの小さな町に生まれました。昭和19年に、東京の国民学校の4年から6年生約150人が学童疎開でやってきました。私たちの町では

一軒一軒が、その一人ひとりの仮親になりました。私の家が仮親を引き受けた少年は、本をたくさん読んでいて、絵も上手で、都会の子どもはすごいなと思っていたのですが、実家のご両親がまず空襲で亡くなります。そして彼自身も3月に、国民学校卒業のためにいったん自宅に帰ったのですが、空襲で死んでしまいました。たいへんショックでした。

さて、加藤周一さんの『私にとっての20世紀』(岩波現代文庫)の中に、こういう文章があります。「私が徴兵を受けなかったのは肋膜炎のおかげもあるのですが、医者だったからでしょう。若手の医者はどうしても病院に必要でした。学校の同級生や友人はかなり大勢死んでいる。自分はやっと生きのびたけれど、別に理由があって生きのびたわけではなく偶然です。何の理由もなく、私の友人は戦争のために死んでしまった」「私の友だちを殺す理由、殺しを正当化するような理由をそう簡単に見つけることはできない」、「だから戦争反対ということになるのです」

加藤さんは、「彼〔亡くなった友だち〕が決して言わなかったことであろうことを自

分が言ったり、彼が黙っていなかったろうことを沈黙したり、ということとはしたくないという気持ちが私の中にはある」。たとえば戦争で死んだ彼らは戦争を肯定しない。それを生きのびた自分が肯定してはいけない。「もしそういうことを私がしゃべれば、それは友だちに対する裏切りのような気がするのです」。これからが素晴らしいところです。「国家への忠誠？　しかし国家が主張する良し悪しは、10年もすれば逆転します。たとえば15年戦争は聖戦から侵略に変わった」。だから国家に合わせて自分が変わるのは無理だとお考えです。

「これは友人関係とまったく違う話です」といいます。本当の友人関係というのは、けんかしたり、ちょっと離れたりすることはあっても一生変わらないわけです。おそらく生きのびた者よりも、いろんなことがよくできた者が、戦争で誰かの号令で、誰かの道具になって死んでいく。そういう友人を裏切らない。ですから最後の引用になりますが、「私の良し悪しの判断の一つは、裏切りということです。友だちを裏切るとはしたくない」。これに私は少年時代の記憶を重ねて、まったくそのとおりだと思います。そしてこじつけかもしれませんが、この友だちは日本国憲法だと思っています。とくに9条、25条は親友中の親友です。彼らを裏切ることはできない、ということを加藤周一さんのご本から学びました。

### 大江健三郎（作家）

先月の朝日新聞のコラムに、国宝阿修羅展を見に行ったこと、そしてお釈迦様の10大弟子の群像に感銘を受けたと書いたところ、いくつもの反響がありました。すべて

加藤周一さんの名をあげてのものでした。私は十大弟子像の、とくに須菩提や羅睺羅の像に感銘して、自分がこの50年間に会ったすぐれた実在の人たちの面影を見出すようだったと書き、文章のタイトルは「知的で静かな悲しみの表現」としました。反響の手紙は、「あなたは加藤周一さんの顔形を見てとったのではないだろうか」といい、その中に、「加藤さんが悲しみを感じられる理由があるだろうか」とありました。

上野からの帰りの電車の中で、私は、あの仏像のような人たち五人ほど、くつきりと思い浮かべました。そしてそれらの人たちは知的で静かな顔形であったけれども、みんな老年になっておられていて悲しみの表情もあらわされていることも感じられる。そして私はあのよう書いたわけです。たしかに私があの中のとくに須菩提をみて深い感動の中で考えたのは加藤周一さんの面影と、その生涯のお仕事でした。

日本文学について学びたい方には、『日本文学史序説』（ちくま学芸文庫）をおすすめします。それは万葉集に始まって日本の文学が、どのように出来上がったかを見ます。重要なのは、日本独自のものがあるけれど、外国文化との素晴らしい出会いによって転換期が刻まれ、その転換期を生きた日本の文学者が新しい文学を作ったことを描きだしていることです。

加藤さんは、ほとんど最後のお仕事として、NHKのテレビで、石川啄木を押し出されました。啄木が1910年前後の時代を「時代閉塞」といい、「われわれは一斉にたつて、まずこの時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ」という言葉を加藤さんは引用され、この時代の貧困と病気を象徴する

肺結核で死んだ啄木の思想的な意味を強く言われました。

加藤さんはこれまでの「九条の会」講演会ではつねに、原理にたちながらも現実状況の細部に即して、世界の、とくに東アジアに起っていることを語られました。多くの方は、おそらく北朝鮮の核実験について加藤さんはどのように話されるか聞きたいと思われたと思います。加藤さんは広島、長崎50年にあたって開かれたパグオッシュ会議での講演（「加藤周一セレクション」第5巻平凡社ライブラリー）で、会議で検討すべき重要な問題点をあげたうえで、いくつかの障害や障壁について話をされました。それは、核兵器保有国と非保有国のあいだの信頼関係をどのように醸成していくか。とくに核保有国と非保有国との間の不平等、核を保有する国家間の不平等、核弾頭の数の不平等性ということです。

政治権力の側ではなく、私たち市民の側からいいますと、北朝鮮の人々と私たち日本人が本当の信頼をつくるためには、私どもは本気で憲法9条を守り、完全に実現しようとしていることを示すことだと思いません。その大道をはっきり示し、それを周辺の国々に、あるいは世界中に認めてもらえるならば、私どもの国と他の核保有国との間の信頼関係を作り出すいちばん大きな条件になると思います。

### 奥平 康弘（憲法研究者）

憲法研究者にはそれぞれ専門があります。9条は9条の専門家がいて、自衛隊の分析とか日米安全保障条約のことなどを専門に研究しています。ぼくは違うことをやっていて、なかなか9条に近づけなかった。ぼ

くを近づけさせたのは、90年代以降の憲法をめぐる状況の変化です。それは憲法9条の戦力不保持の問題だけではなく、自衛隊がどのように機能するか、という今までなかった議論が出てきたからです。湾岸戦争のなかで、自衛隊を海外に派遣することと憲法9条の関係が論議され、今世紀に入ると、集団的自衛権の行使が憲法の解釈によってできるという話になってきた。個別的自衛権の範囲内でこじんまりとやっていくという議論は吹っ飛んでしまう。集団的自衛権で他のどこかの国と結びつけば青天井になって、なんでもできるようになる。装備はもちろん、それに応じた機能を果たすことになる。それを憲法の解釈でできるという話に展開していくのが、90年代の終わりから今世紀に入ってから情勢です。

文字として書かれている9条は、一定の重要な役割を果たすことは間違いない。そしてきちんとした解釈が確立されるべきです。同時に、この2、3年の動きの中からも、9条は日本の問題、日本国憲法の問題であったのが、世界に向けて語られるようになった。そのようななかで、「九条の会」が出来たわけです。それが大きな支持を得て、ぼく自身も驚くくらい組織が着実にのびていると思います。

「民芸」のお芝居に、加藤先生とボクがたまたま招待されて、椅子を並べて観劇しました。ぼくたちが見たのは木下順二の「審判」という、東京国際裁判を題材としたものでした。田母神さんという人がいますが、あの人は東京裁判を全くボロクソにやっつけていますが、しかし問題は単純ではない。たとえば、あれは連合国がおこなった裁判ですが、権力はどこからくるのか、これを

裁判長がもつということは、どこからどのようにして出てくるのかという問題があります。さらに人類に対する罪というけれど、それは昔からあったのか、そういう問題が混然としてあるわけです。ところが田母神さんにいわせるとスカッとってしまう。ほんらい難しい問題を、皆さんに食いつきやすいようにしてばらまくということは、大衆政治家のやることですが、それを彼はいたるところでやっています。

ところで芝居を見た後で、加藤先生は、「こんなに難しい芝居をこんなにたくさんの方が見に来てくれるんだねえ」と、感慨深げにおっしゃいました。実際、芝居は難しいです。それを満杯になるほど見にきてくれたということです。その時は気がつかなかったけれど、後で考えたら、「だから日本の将来はまんざらではないよ」ということだったのだと思います。「まんざらではないよ」と一安心された加藤先生を本当に満足させるように、われわれはすべきではないかと思います。

### 澤地 久枝（作家）

今日は一冊の本をお持ちしました。加藤さんが戦後間もなく書かれた小説『ある晴れた日に』という作品です。加藤さんはそんなにたくさん小説を書いておられないと思いますが、これは昭和 25 年 3 月に出た本です。6 月 25 日に朝鮮戦争が始まった年です。私は、正直言いますけれども、この本を一生懸命読んで、「大人の小説で自分には縁がない」と思ったことを覚えています。亡くなられてから、読み返しました。

この小説の最後は、「ある晴れた日に戦争は来たり、ある晴れた日に戦争は去った」

で終わっています。昭和 16 年 12 月 8 日は記憶がありませんが、昭和 20 年の 8 月 15 日はよく晴れていたという記憶があります。この小説の主人公は病院勤務をしている医局員で、昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲で負傷した人びとを治療しながら空襲をつぶさに見た。小説の中には特攻出撃で死んでいくパイロットとか、退役の海軍中将でとか、蛇のようにつきまとう憲兵も出てきます。舞台は戦地ではなく、東京とたぶん軽井沢です。そこではドンパチの音も何も聞こえてこない、しかし戦争に対する批判をもっている人間が、どんなに孤独で、そして追い詰められているかということがつぶさに書かれています

朝鮮戦争が始まっているわけで、まだ 20 歳前の私は、戦争に対して自分はいかに生きるかを一生懸命考えていましたが、この小説の値打ちはわかりませんでした。加藤さんは「あとがき」のなかで、「この小説を、戦争に傷ついた若い日本国民のすべてに捧げたいと思う」と書いています。私も、たぶん傷ついていた若い日本人の一人だったのですね。

今日は若い人もみえているけど、でも九条の会というと、実際には戦争体験がある人が、地域で一生懸命「会」を守り育てている。若い人を増やそうとしているが、「この頃の若い者はだめだ」という声もあります。だけど、いまから約 60 年前の澤地久枝も聞く耳をもたない人間だった。私などは追体験で勉強してきて今では絶対に戦争をしてはいけないという信念をもっている。そのように一生懸命思って、ムキになってものを言おうとしている人間と、あの人たちは何であんなふうになんか一生懸命やっている

のだろう、ご苦労なことだと思っている若い人たちのあいだに、橋をかけなくてはダメですね。加藤さんは、晩年ということになる時期に、下関に行って大学生たちと話をした。そうしたら話がちゃんと通じた。それで、これからは老人と若い者が、憲法9条を守る運動の中心にならなければダメだと考え、次の年は早稲田へ行って学生との交流会をおもちになった。若い感性、若い思考というのは、ゆさぶれば、分かる言葉で働きかけていけば、ああそうかときつと思うと思います。

私たちは小田さんを失い、加藤さんを失った。私は市民運動は引き算ではいけないと思います。一人が二人になり、二人が三人になり、倍々ゲームのように足し算になっていくことが市民運動の生命だと思います。いろいろな問題がありますが、一点にしぼるとなると九条守ることになると思います。その気持ちを人から人につないで、足し算にしていくことで、小田さんや加藤さんのお気持ちを生かしていくことができますと思います。

### あいさつ (要旨)

#### 矢島 翠 (加藤さんのパートナー)

物書きというのは、エゴイスティックなもので、いま自分がしている仕事、これからしようとしている仕事がいちばん大事で、読んだり書いたり、話したり、の方に重点をおくものですが、加藤の最晩年には、私たちも一緒に経験した大きな事件がつぎつぎに起って、むしろ実践活動の方に比重がうつるようになりました。それは大きな変化でした。横でみていて、加藤がよく、これだけ動くようになったという感じがいた

しました。

21世紀になったとたんに、アメリカでおこった「同時多発テロ」、それに日本が同情して、日米安保条約のもとで、テロ対策特別措置法ができて、アメリカ等の後方支援を始めました。さらに、イラクの戦いを援助するということがおきたわけです。それを見ていて加藤はたいへん危機感をもったようです。日本の憲法こそは人類の理想の先取りだと信じておりましたから、どうにかしなければならぬ、アメリカの言いなりになってその支援を始める、それを阻止しなければならぬ、というので、「九条の会」のアピールで皆様によびかけて、そして5年前の6月に発足したわけです。

ですから加藤の人生は大きく変わって、物書きのエゴイズムから抜け出し、「九条の会」を広げる運動、これもピラミッド型ではなくて、既成の組織に乗っからずに、一人ひとり生きて、暮して、ものを考える、そういう人たちが手をつないで、ゆるやかなネットワークをつくるという、そういう最初のねらいはまず達成できたのではないかと思います。

世界の理想である憲法を、このゆるやかなネットワークの中で生かしていく、それを根づかせていく、ということができましたら、加藤の遺志は達成できると思います。

### メッセージ (要旨)

#### 梅原 猛 (哲学者)

加藤氏は私より少し先輩ですが、世に出たのは加藤氏の方が私よりずっと早く、私は加藤氏を1世代前の人のように思っていました。加藤氏とはそれほど深いつきあい

があったわけではなく、むしろ私とは正反対の位置にある思想家であると思っていました。ところが、ある新聞の企画で加藤氏と対談し、2人の意見が意外に近いことを発見したのです。加藤氏も私も戦中派で散々苦勞し、戦争というものがいかに人間を不幸にするかを深く感じ、憲法9条の理想を守らなければならないという点において2人の意見は一致したのです。

80を超え、人類のため日本のために書かねばならない著書を残したいという気持ちが強くて、あまり「九条の会」の会合に参加できませんが、平和憲法には人類が生き延びるための必要欠くべからざる理想が含まれていて、それを絶対に守らなければならないという気持ちは些かも動揺していません。北朝鮮のこともあり、日本にも核軍備せよという意見も出るかと思いますが、私は絶対に反対です。2人の有力な発起人を失いましたが、私は「九条の会」の精神が大多数の日本人の信念になることを願ってやみません。

### 鶴見 俊輔（哲学者）

晩年の彼の文章を読んで、90年に近い仕事の成熟を感じました。

日本のこの時代の特色は鎖国です。鎖国に抗して、加藤周一は生きました。はじめは、日常的な感性にあり、府立一中の生徒の頃、柔道で友達の胸ぐらを取って投げることなどに身を入れられない。教師はそれを見て一時は赤点をつけ、高校進学さえあやぶまれたそうです。しかし教師が譲って高校、大学に進学しましたが、広島・長崎に米国が原爆を落とします。日本だけでなく、世界が鎖国になります。

ヒポクラテスの時代には、科学知識を犯罪に使わないことが科学者（主として医学者）の心得とされたわけですが、このときから科学は国家と結びつき、何百人の人間を殺す力をもつものになります。医学生としての加藤周一は、このような世界の鎖国に向かって立たされることになります。

この時代の戦争に立ち向かう、「九条の会」をおこす運動は、彼の志となります。運動を起こして、続けることです。そのように、彼は考えて、その生涯の終わりまで生きました。私もそのようでありたい。

## 当面の取り組みについて

講演会に先立って開かれたよびかけ人会議では、「九条の会」としておこなう当面の取り組みとして、次のことを確認しました。

◎今年是全国1箇所でおこなう「全国交流集会」とはせず、かねてから要望が出ているブロック別の交流集会として、活動の濃密な交流をめざす。

具体的には、「九条の会」と都府県の「会」が協議しながら、合意ができたところから順次開催する。

◎「九条の会」よびかけ人とゲストが講師をつとめるこれまでの「憲法セミナー」を引き続き開催する。

当面の予定として11月に福井での開催をめざすが、その後については、地域的条件とよびかけ人の都合なども考慮しつつ決定する。

なお、事務局はこの日、地域・職場・分野別などの草の根の「会」が7443に達したと発表しました。